

保育者養成課程科目「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」 の教授内容の検討

— 保育士養成テキストの分析 —

梶 美 保

要 旨

2008年に改定した保育士養成課程科目「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」用に編纂されているテキストの傾向及び内容について分析した。内容的には、子どもの保健Ⅰが7割、子どもの保健Ⅱの5割が厚生労働省の標準シラバスに準拠していた。準拠していなかった項目で多かったのは、子どもの保健Ⅰでは、「子どもの生活環境と精神保健」「職員間の連携と組織的取組」、子どもの保健Ⅱでは、「保健活動の記録と自己評価」「障害のある子どもへの適切な対応」「子どもの養育環境と心の健康問題」「心とからだの健康づくりと地域保健活動」であった。改正の趣旨である「保育現場における保健的対応」「子ども集団全体の健康と安全」「子どもの心身の健康について総合的に理解」の対応が十分であったのは半数に過ぎなかった。

I. 研究の背景と目的

保育士養成は、1948（昭和23）年以來68年の歴史があり、ガイドラインである保育所保育指針はこれまで3回の大きな改定があった。保育士養成課程科目は、厚生労働省で定められており、直近では、2008（平成20）年に保育所保育指針が改定されたことを受けて2010（平成22）年に改正（2011年実施）されている。この科目の中で、「小児保健」、「小児保健実習」は、「子どもの保健Ⅰ」（講義・4単位）、「子どもの保健Ⅱ」（演習・1単位）と名称が変更となり、押さえるべき教授内容が示された。本科目のテキストは、従来、記述内容が学生にとって難解な部分や保育現場に即した内容となっていないものがみうけられ

た。これは、医学関連領域ということもあって、テキストの多くが、保育士養成施設校（大学、短大、専門学校）の教員以外の医師および看護系大学教員によって執筆されていることもその要因の一つであるかと推察される。今回の改正では、「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」にシラバスが示された（以下本稿では「標準シラバス」と表記）こともあり、新規に30冊余のテキストが改定刷新あるいは新規発刊されている（表1・2参照）。

そこで、保育士養成課程用に編纂されたテキストの分析を通して教授内容の把握と内容の吟味を行い、本科目で扱うべき教授内容の体系化を試みることを目的とする。本稿では、分析の第一段階として、出版及び監修・編著の実態、テキストの目次を総覧して傾向を報告する。

Ⅱ. 研究方法・内容

研究対象は、保育士養成課程改正後に「子どもの保健テキスト」として編纂発刊され入手可能であった32冊（2008年度～2015年7月末現在のもの、19出版社、「子どもの保健Ⅰ」が22冊、「子どもの保健Ⅱ」が11冊、うち「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」（合体本）1冊である。研究方法は、以下の手順である。

- (1) 保育養成カリキュラムにおける「小児保健」から「子どもの保健」への改正の趣旨、カリキュラムにおける位置づけを確認する。
- (2) 本科目以外の保育者養成課程科目との関連項目を確認する。
- (3) 出版及び監修・編著の概要、テキストの目次の上位項目2段階までを（大項目・小項目と表記）抽出し、標準シラバスとの整合性を試みる。本項目作成にあたって、保育者養成校で同科目を担当する専任教員2名に依頼し、評価が異なる場合には検討し調整を行った。
- (4) 「保育士が保育所等で必要とされる保育保健」の視点から考察する。

Ⅲ. 結 果

- (1) 改正の趣旨：「子どもの保健」に特筆して記述すると、教科目の配列は、「保育の内容・方法に関する科目」（旧：保育の内容方法の理解に関する科目）と同様で、保育現場において、子ども一人一人の心身の状態や発達の過程を

踏まえ保健的対応を行うことや、子ども集団全体の健康と安全を考えること等の重要性にかんがみ、「子どもの保健」とする。また、子どもの心身の健康について総合的に理解することが重要であるため、現行の「精神保健」を含む内容とする、と改正の趣旨がなっている⁽¹⁾。つまり医療分野の「小児保健」ではなく、保育の場において保育士の行う保健活動に必要な理論と、実践ができるための基盤を身に着けることが求められている。

(2) 「子どもの保健Ⅰ」「子どもの保健Ⅱ」の科目の目標、内容、関連科目：図1の通りである。

(3)-① 出版及び監修・編著の概要：7出版社が「子どもの保健Ⅰ」「子どもの保健Ⅱ」を出版、そのうち、5出版社の書籍が同一の編著者であった（合冊本1冊含む）。監修あるいは主たる編著者については、「子どもの保健Ⅰ」は、小児科医が8割、保育養成校教員が2割弱、「子どもの保健Ⅱ」は、小児科医、看護大学系教員、保育士養成系教員がそれぞれ3分の一ずつであった（表1・2）。

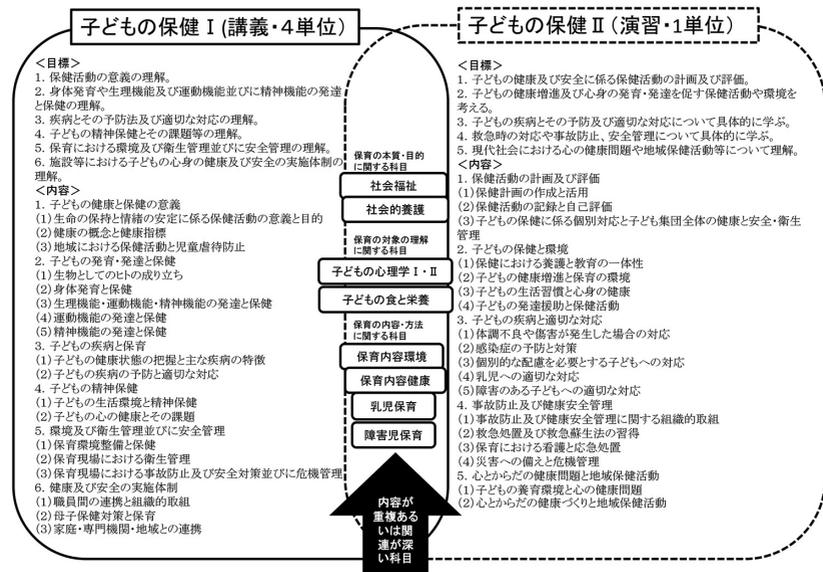


図1 「子どもの保健Ⅰ」「子どもの保健Ⅱ」の科目の目標と内容、関連科目

(3)-② 標準シラバスの項目との整合性：標準シラバスの項目に準拠されているもの（大項目，中項目）は，子どもの保健Ⅰでは，「完全・ほとんど(◎)」が22.7%，「独自の目次であるが内容的に準拠(○)」が45.5%，「そうでないもの(△)」が31.8%であった。子どもの保健Ⅱでは，「完全・ほとんど(◎)」が25.0%，「独自の目次であるが内容的に準拠(○)」が25.0%，「そうでないもの(△)」が50.0%であった。標準シラバスにおける大項目・中項目の目次レベルにおける対応がなかった項目は，子どもの保健Ⅰでは，「4-(1) 子どもの生活環境と精神保健」が36.4%，「6-(1) 職員間の連携と組織的取組」が36.4%が，子どもの保健Ⅱでは，「1-(2) 保健活動の記録と自己評価」が41.7%，「3-(5) 障害のある子どもへの適切な対応」が33.3%，「5-(1) 子どもの養育環境と心の健康問題」が41.7%，「5-(2) 心とからだの健康づくりと地域保健活動」が41.7%であった。

標準シラバスに大項目を追加しているものをみても，子どもの保健Ⅰでは，「栄養」が59.1%，「生活」が40.9%，子どもの保健Ⅱでは，「養護」が58.3%，「身体計測」が50.0%という結果であった（表1・2）。

(3)-③ 改正の趣旨への対応：「保育現場における保健的対応」「子ども集団全体の健康と安全」「子どもの心身の健康について総合的に理解」の項目3点について，最もその項目の内容が記述として重要視されやすい中項目を抽出して検討した。「5-(2) 保育現場における衛生管理」の内容が「保育現場における保健的対応」の視点で記述されていたのは54.5%であった。同様に「4-(1)事故防止及び健康安全管理に関する組織的取組」では41.7%であった。「3-(2) 子どもの疾病の予防と適切な対応」を「子ども集団全体の健康と安全」の視点で記述されていたのは36.4%であった。同様に「1-(3) 子どもの保健に係る個別対応と子ども集団全体の健康と安全・衛生」では58.3%であった。「4-(1) 子どもの生活環境と精神保健」の内容が子どもの心身の健康について総合的に理解」の視点で記述されていたのは50.0%であった。同様に「5-(2) 心とからだの健康づくりと地域保健活動」では41.7%であった。また，「精神保健を含む内容」ということで，「4-(1) 子どもの生活環境と精神保健」「4-(2) 子どもの心の健康とその課題」については，その項目立

てが様々であった。

その他、今回の改正でほとんどすべての出版社が初版としていた。また、予防接種の改正、関連する法律の改正などで改訂となっていなくても数値等が修正された版を出しているところは、「子どもの保健Ⅰ」では40.9%、「子どもの保健Ⅱ」では58.3%であった。

Ⅳ. 考 察

この研究は、現存する保育者養成校テキストが望ましいものであるのかテキストとしての価値を問うものである。本科目の担当者の多くが、保育者養成校の専任講師ではなく、保育士養成課程（保育の場）の理解が少ないと推察される非常勤講師の立場である医療職が多いという前提であるならば、今回の改定のように「保育の場における保健活動に必要な保育士のための子どもの保健」ではなく、「小児保健」の内容を学生に教授してしまう可能性が否めない。よってテキストの妥当性が問われるのである。「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」は、医療分野の教育カリキュラムのように、理論と臨地における実践というように階層的ではなく、解剖生理学のような基礎知識がない前提で各項目を教授することが必要な科目となっている。つまり「小児保健」は、医療保健福祉領域の科目として存在するが一般的には解剖生理学、病理学などの基礎知識等を前提に構成されている。保育士養成課程における「保育現場で活用できる保健活動」のための「子どもの保健」は、この基礎知識の部分を含み、かつ「集団生活という保育の場」「対象年齢」が限定されたものである。今回の改定においてその点を明確化するために名称を変更し、標準シラバスが示されたのであろう。

テキストの活用の是非に関する論議もある。テキストを教えるものではないという見方もある。しかし、保育者養成校において「子どもの保健」科目については専任が少なく、他分野の非常勤講師となっている大学が多いのではないだろうか。選択したテキストの項目や視点が重要となる。筆者は、今回の改訂をきっかけに本科目の方向性がより定まってきたように感じたことから本研究に着手した。

改正の趣旨からは、科目の目標、内容的な視点を確認した。次いで保育者養

成課程の科目全体をみることで近接領域について確認した。各養成校においてカリキュラム全体としての位置づけ（学年による配当科目や順序など）、関連科目との内容の重複や項目の軽重、視点を明確にして教授することが効果的な授業を展開することにつながるのではないかと考える。

目次レベルの対応では両科目とも完全準拠が2割強であり、多くの出版社が今回必要な項目を付け加えるなどの対応となっていた。標準シラバスに大項目を追加しているものが半数あったことから、監修あるいは編著者が標準シラバスの構成に対して満足していないことが伺われる。

改正の趣旨への対応は、今回は一部抽出のみの結果であるが記述された内容に視点が十分反映されていない点が明らかになった。次の段階で項目ごとにさらなる分析をしていく予定である。

その他、「子どもの保健Ⅰ」の「1-(2) 健康の概念と健康指標」の健康指標の内容を見てみると人口統計、出生と死亡率、事故統計、虐待統計等が殆どであるが、現在「心の健康指標」というような項目も出てきていることへの検討や、6割弱のテキストで追加されていた大項目「栄養」は、「子どもの食と栄養（演習2単位）」科目との重複があること、2015（平成27）年4月より本格施行された子ども・子育て支援新制度における家庭的保育、小規模保育事業などの保育の場の拡充に伴った「保育現場」の考え方の再検討などいくつかの分析・検討すべき項目がでてきた。

以上、まだ十分ではないが、おおよそのテキスト編纂の傾向及び内容について概観することができた。今後さらなる分析をしていきたい。

V. ま と め

厚生労働省による改定の趣旨を確認したところ、「小児保健」から「子どもの保健Ⅰ」への改定の趣旨が医療保健福祉分野の「小児保健」と同様のものではなく、「保育の場において保育士の行う保健活動に必要な」理論と、保育活動ができるための基盤を学び理解すること、つまり「保育の場」「保健的対応」「子ども集団全体の健康と安全」がテキスト構成の視点として重要であること等を確認した。

保育士養成課程テキストを分析したところ、内容的には、「子どもの保健Ⅰ」が7割、「子どもの保健Ⅱ」の5割が標準シラバスに準拠していた。準拠していなかった項目で多かったのは、「子どもの保健Ⅰ」では、「子どもの生活環境と精神保健」「職員間の連携と組織的取組」。「子どもの保健Ⅱ」では、「保健活動の記録と自己評価」「障害のある子どもへの適切な対応」「子どもの養育環境と心の健康問題」「心とからだの健康づくりと地域保健活動」であった。

改正の趣旨である「保育現場における保健的対応」「子ども集団全体の健康と安全」「子どもの心身の健康について総合的に理解」の対応が十分であったのは、今回一部の分析ではあるが半数に過ぎなかった。

監修あるいは主たる編著者については、「子どもの保健Ⅰ」は、小児科医が8割、保育養成校教員が2割弱、「子どもの保健Ⅱ」は、小児科医、看護大学系教員、保育士養成系教員がそれぞれ3分の1であったことから、目的的には標準シラバスに対応して再構成されたが、改正の趣旨に沿った記述内容とはなっていなかったことがわかった。また、健康指標の項目として一般的な人口統計、出生と死亡率、事故統計、虐待統計等以外に「心の健康指標」の項目追加の必要性がある。

本稿は、平成25年度科研費基盤(C) 課題番号25350086「乳児保育の衛生的な環境に関する研究」で実施した一部であり、日本乳幼児教育学会第25回大会で発表した同タイトルの発表原稿に加除して執筆したものである。

文 献

- 1) 保育士養成課程検討会(2010) 保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)
- 2) 民秋言(2014) 幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立, 萌文書林.

分析対象としたテキスト一覧

○子どもの保健 I

編著者	書名	出版社	出版年(版)
安藤和彦・戸江茂博他監修 落合利佳編著	子どもの保健	あいり出版	2012初版
遠藤郁夫・曾根眞理枝他監修	子どもの保健 I	学建書院	2013初版
衛藤隆・近藤洋子編	新しい時代の子どもの保健	日本小児医事出版社	2014初版
加藤忠明・岩田力 編著	図表で学ぶ子どもの保健 I	建帛社	2010初版 2011(2版)
岸井勇夫・無藤隆・柴崎正行監修 巷野悟郎・岩田力・前澤眞理子編著	子どもの保健 I—理論と実際—	同文書院	2011初版
巷野悟郎編	子どもの保健 第4版	診断と治療社	2014初版
巷野悟郎・高橋悦二郎編著	改訂 保育の中の保健	萌文書林	2010初版
佐藤益子編著	子どもの保健 I	ななみ書房	2011初版 2014(6版)
新 保育士養成講座編纂委員会編 (編纂委員長 大場幸夫)	新 保育士養成講座 第7巻 子どもの保健 (IとII合体本)	全国社会福祉 協議会出版部	2011初版
志賀清悟 編著	子どもの保健 I	光生館	2012初版
鈴木美枝子編著	これだけはおさえない！ 保育者のための子どもの保健 I	創成社	2011初版 2013(2版)
高内正子編著	心とからだを育む子どもの保健 I	保育出版社	2012初版 2014(4版)
竹内義博他編	よくわかる子どもの保健	ミネルヴァ書房	2012初版
高野陽他編著	小児保健 新版	北大路書房	2011初版 2013(2版)
中村肇監修	子育て支援のための子ども保健学	日本小児医事出版社	2012初版
西村昂三編著	わかりやすい 子どもの保健	同文書院	2012初版
服部右子 大森正英編著	図解 子どもの保健 I	みらい	2011初版 2013一部改訂
林邦夫・谷田貝公昭監修 加部一彦編著	子どもの保健 I	一藝社	2014初版
平山宗宏編	子どもの保健と支援	日本小児医事出版社	2011初版 2012(2版)
堀弘樹・梶美保編著	保育を学ぶ人の子どもの保健 I	建帛社	2014初版 2015(3版)
山崎知克編著	子どもの保健 I	建帛社	2013初版
渡辺博	小児保健 改訂第2版	中山書店	2010初版 2012(2版)

○子どもの保健Ⅱ

編著者（3名まで記載）	書名	出版社	出版年(版)
今井七重	演習 子どもの保健Ⅱ	みらい	2012初版 2015(4版)
上山和子・木下照子・ 谷野宏美編著	子どもの保健演習ノート 第2版改訂版	ふくろう出版	2011初版 2015(2版)
大西文子	子どもの保健演習	中山書店	2012初版 2015(4版)
兼松百合子他編著	新訂 小児保健実習	同文書院	2010初版
佐藤益子編著	子どもの保健Ⅱ	ななみ書房	2011初版 2014(4版)
榊原洋一監修	これならわかる！子どもの保健演習ノート	診断と治療社	2013初版
志賀清悟 編著	子どもの保健Ⅱ	光生館	2012初版 2015(4版)
鈴木美枝子	これだけはおさえたい！ 保育者のための子どもの保健Ⅱ	創成社	2012初版 2015(4版)
高内正子編著	改訂 子どもの保健演習ガイド	建帛社	2015初版
高内正子編著	心とからだを育む子どもの保健Ⅱ	保育出版社	2013初版
野原八千代編著	子どもの保健演習セミナー	建帛社	2012初版 2015(4版)

Consideration of Contents of the Childcare Worker Training Programs “Children’s Health I & II”

– Analysis of the textbooks for the childcare worker training –

Miho KAJI

Abstract : I analyzed the tendency and contents of the textbooks that are compiled for the childcare worker training programs “Children’s Health I & II”, which were revised in 2008. In respect of the contents, 70 percent of the Children’s Health I and 50 percent of the Children’s Health II comply with the standard syllabus of Ministry of Health, Labour and Welfare. The sections with the most non-compliant contents are “Living environment and mental health of children”, “Cooperation between staff members and organizational approach” in the Children’s Health I and “Recording of healthcare activity and self-assessment”, “Appropriate responses to children with disabilities”, “Nurturing environment and mental health problems of children”, “Promotion of mental and physical health and the local healthcare activities” in the Children’s Health II. Only the half of the textbooks sufficiently cover “Healthcare response in the nursery field”, “Health and safety of the whole group of children”, and “Comprehensive understanding of mental and physical health of children”, which were the purposes of the revision.